あこがれて、さようなら

Mu

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。

この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

あこがれて、さようなら

【Ｎコード】

Ｎ９８４８Ｃ

【作者名】

Ｍｕ

【あらすじ】

「このまま卒業していいんだろうか？どうして、ひとこと言えなかったんだろう？」中学の卒業式にのぞむ富くんの心は焦りと後悔に染まっていた。きっと誰もが経験したことのある切なく淡い恋を、さわやかに描くラブストーリー。初恋を想い出したい人に。

前編

雨は静かに降りそそぎ、式は厳かに進んでいた。その中で僕は、
これでいいのだろうか？
このまま卒業していいのだろうか？
とくり返し問い続けていた。
静寂の中で、焦りと自己嫌悪が目に見えない糸に引かれて、僕を縛り付け、
目の前の出来事は、自分とは関係のない世界のように動いていく。
意識は、あの日へ、あの時へ戻っていた。

春だった。そう、ちょうど一年前の春だった。
図書館では、前期の委員長と、副委員長の選出会議をしていた。
「それじゃあ、僕でいいんですね、委員長は？」
昨年の後期から委員長をやらされていた僕は、またもや推薦で、委員長にあげられていた。
しかし、僕としては、辞めたかった。
昨年は行きがかり上、前任の委員長の推薦で嫌々引き受けたのだが、
引っ込み思案で、内気な僕にとって、こういった仕事は苦痛だった。
「富（とみ）君。じゃあ、君、委員長決定だね」
係の先生が言った。
「あ、はい。じゃあ、やります」
僕はあきらめて答えた。
「富先輩！がんばってくださいね」
一人の少女が声をかけた。僕はその子の方を向いていった。
「西岡さん、副委員長、君がやってね。僕を委員長に押し立てた、

バツだよ」
「そんなあ、先輩。今年はやめさせてくださいよ」
「ダメ。委員長権限！」
実を言うと、彼女は昨年もやっぱり副委員長をしてくれていて、内面的に内気な僕が、何とかやっていけたのも、彼女が手伝ってくれたからなのだ。
外面的には、しっかり見えて、そのくせ気の弱い僕に比べて、彼女は本当にしっかりしていて、時には、逆に引っ張られることも多かった。
僕が委員長をやる以上、やはり彼女に手伝ってもらわなければ、ダメだと思った。
「また先輩とやるんですか？私、先輩とやると、肩凝るんです。やたら仕事が多いから」
「それ、嫌み？西岡さん」
委員達の笑いが部屋に響いた。

静寂は、やはり重くのしかかり、次々に呼ばれていく名前は、いったい誰の名前なのか、見当さえつかなかった。
僕は、もう、そんなことは少しも気にとめず、一心にあの時をたどっていた。

春は瞬く間に過ぎ、校庭には初夏が来ていた。
委員長になった僕は、しかし、その一学期間を、ほとんど図書館の方へは行かなかった。
一学期には、ほとんど何も行事らしき物がなかったこともあるが、それよりも、やはり三年になって、何かと忙しかったからだ。
二年の時には、放課後になると、決まって図書室へ足を運び、委員達と雑談して過ごしたものだが、この一学期には、ほとんどそう

いうこともなかった。
だから、図書のことは、全て西岡さんにまかせっきりだった。
すまないとは思っていたのだが、反面、図書のことを忘れていたようにも思う。

一学期最後の日。僕は実に久しぶりに図書室へ行くことにした。
その日は、一学期に貸し出した本の最後の返却と、夏休み中の貸し出しの受付をする日だった。
多分、こんな日ぐらい顔を出さなければという気持ちだったのだろう。
僕は、足早に図書室へ行った。

着いたとき、まだ誰も来ていなかった。
僕は戸を開いて、中へ入った。
そのとたん、僕は、そこに立ちすくんでしまった。
長い間来なかった図書室が、僕を待っていてくれて、何か、さそっているような気がした。
懐かしい部屋の隅々の、一年から委員をしている僕の思い出が、ゆらゆらと揺れて、そこかしこの本棚が、目にしみてきた。
学校生活のほぼ半分を過ごしたこの部屋が、何か、ものすごく貴重なものに思えた。
そして、一学期の間、訪れなかったことが、あたかも、自分の大切にしていたものを失ってしまって、取り返しのつかないことのように感じられた。
僕は、歩き出そうと思った。失った時を取り戻すために、歩き出そうと思った。

と、その時。ポンッと肩をたたかれた。
驚いて振り返ると、そこに、彼女、西岡さんが立っていた。
「お久しぶう、先輩。どうしてたんですか？」

彼女がはずんだ声で言った。
「え、うん、ちょっとね」
僕は慌てて答えた。
「長い間、来てくださらなかったですね」
「うん。そうだね」
「先輩、もっと図書室に顔出してくださいね。みんな、富先輩がいないとさびしいなんて言ってますから」
彼女が僕を見つめて、いやに真剣に言うものだから、僕は、こう言ってしまった。
「うん、そうするよ。僕もここに来ないとさびしいから」
それは、半ば本心だった。さっき、この部屋に入ったとき感じた感覚は、まだ強く残っていた。
それに、彼女を見つめていると、胸がドキドキしてきて、僕は目をそらしてしまった。
そして、部屋の中へ、歩を進めた。
さっきの感覚が、まだ残っているんだなあと思いながら。

図書の委員なんていうのは、みんな、さぼることが多いのだけど、この日やってきたのは、僕と、彼女の他には、中村という僕の親友だけだった。
この日は、時間が少ない上に、一学期最後なので、利用する人が多くて忙しかった。
加えて、僕は長いこと貸し出し事務をやっていなかったので、時々間違えそうになって、手間取ってしまった。
「富先輩、本当に、もうちょっと来てくださいよね。それじゃあ、委員長だって威張れませんよ」
彼女が笑いながら言った。
「図書の委員長なんて、どっちにしても威張れんもんな〜、富」
中村が、すかさず口を入れた。
「そう、そう、名前だけで、要するに雑用係みたいなものだね」

僕も言い返した。
こういった冗談の言い合いは、図書室にいるとしょっちゅうなのだが、
さすがに僕には、このときは懐かしく、かつ、心安まる気持ちがした。

その日は、図書室を締めて、途中まで3人で帰った。
西岡さんと途中で別れた後、僕と中村は、ゆっくり歩きながら、夏休み中の勉強や高校入試のことなどを話し合った。
そして、別れるとき、ふと、彼が、こんな事を言った。
「富、おまえ、西岡さんのことを大切にしろよ」
「え、なんだい、それ？どうして……」
僕は突然のことに驚いて、答えられなかった。
「多分、彼女、おまえのことが…」
中村が言いかけた。僕はその続きが解ったので、慌ててさえぎった。
「そんなこと無いよ。僕なんかに……」
「まあ、いいさ。じゃあな、富。休み中さぼるなよ」
彼はもどかしそうな口調でそういって、自分の道の方へ歩いていった。
僕は、しばらく歩き出すこともせずに、
「そんなことはない」
と、くり返し、彼の言葉をうち消していた。

ああ、なぜ、あの時、肯定しなかったのだろう？
気にとめなかったのだろう？
僕は、重く沈んだ心で考えていた。
あの時、気づいていれば、もっと時間があったのに。
もっと余裕があったのに。

僕の内気な心でも、決心するだけの時間があったかも知れないのに……。
式の続く講堂には、雨音だけが響いていた。

けれど、夏休みは、そんなほんの些細な一言を忘れさすには、十分長く、
おまけに、僕らは悲しき受験生のために、勉強に追いやられてしまった。
四十日の休みは、わずかな蝉の音だけを印象に残し、過ぎ去っていった。

二学期。僕は言葉通り、図書室へ足を運ぶことが多くなった。
休みの間、みっちりやった余裕も少しはあったのだ。
それと共に、何か図書の活動の方もやっておきたいという気持ちになっていた。
昨年は、新聞などを発行し、アンケートをとったりしていたのだが、
今年は、一学期の間、何もしていなかった。
こういう発行物は、主に、僕と中村とでいつも書いていて、
委員には、後のアンケートの集計などを手伝ってもらうだけだったので、
一学期には誰も発行していなかったからだ。

僕はすぐに、アンケートを作成し、遅ればせながら第一号として発行した。
回収は、各クラスの委員がしてくれる。
そして、クラスごとに一応の集計を出してもらって、後で僕らがそれを見直し傾向などを調べて、ふたたび新聞などで発表する。

これが、実に、一人でやるときつい仕事なのだが、僕はその時、いっそ一人でやろうと思っていた。やはり、一学期間、何もしなかった反省と後悔の気持ちがあった。
けれど、中村が半分やってやると言ってくれたので、僕は感謝しながら、三分の一ほど渡した。
「じゃあ、富。おれ、もう帰るから。これだけ明日までにやってきてやるよ」
彼は、図書室の椅子から立ち上がった。
「ああ、ありがとう。僕はもう少しやってしまってから帰るよ」
彼は机の上に載せられてあるアンケートを束にして手に取り、部屋から出ていった。
「さて、下校時間まで、やれるとこまでやるか」
僕はそうつぶやいて、ふたたびアンケートと資料に取りかかった。

しばらくして、背後で人の気配を感じた。僕は、中村だろうと思って、
「中村か？何か、忘れもんでもしたのか？」
そういって振り返った。
けれど、そこにいたのは、彼ではなかった。
「富先輩。手伝いましょうか？」
「あ、西岡さん」
彼女だったのだ。
白い手提げカバンをもって、ドアのところで、のぞき込んでいた。

後編

「先輩、手伝います。先輩だけじゃ、時間がかかり過ぎちゃいますから」
そういって、彼女は部屋の中へ入ってくると、机を挟んで、僕の前に座った。
「う、うん。それじゃあ、これだけやって」
僕は、残りのアンケートの中から、素早く三分の一ぐらいをつかんで、渡した。
「はい。帰るまでに、やってしまいますね」
彼女はそういうと、カバンの中から鉛筆をとりだして、仕事を始めた。
僕も、まあ、いいか、と思いながら、仕事に取りかかった。

ところが、この日、彼女はいつもと違って、無口だった。
ほとんど何も話さずに、黙々と、という感じで資料に向かっていた。
僕としても、話しかけられない方が、仕事はやりやすかったのだが、何かもの足りず、
しばし手を休めて、彼女に何か話しかけようか、などと考えたりした。
そして、そんなとき、ふと、あの一学期最後の日、帰りに中村がいった言葉を思い出したりした。
別に深い意味もなしに。

その日は、下校時間になっても、やはり彼女が何も言わないので、「もう、やめようか」と声をかけようと思ったのだが、彼女が帰りまでに終わらせるといったこともあって、かけづらく、結局だいぶ

帰るのが遅くなってしまった。
僕と彼女は、薄暗くなりかけた道を一緒に帰った。彼女はその時も無口だった。
「どうしたんだろう？何かあったのかな？」
と、僕が思っていたとき、彼女が、つと足を止めて、小さい声でいった。
「富先輩、好きな人、いるんですか？」
僕は、何と答えていいのか解らず、彼女の方を見た。
うつむいていたはずの彼女は、いつの間にか僕の方を見つめていた。
「西岡さん、どうして、そんな……」
そういいながら僕は、
なにいってるんだ。どうしてって、分かってるじゃないか。
という気持ちと、
いや、そんなことはない。
という気持ちが交差して、それ以上何も言えなくなった。
ふっと、彼女は顔を伏せて、そのまま走り出してしまった。
そして、夕暮れの中に消えていった。
僕は、追わなかった。それを考えられなかった。頭の中には、いろいろな想いが反響し合っていた。

彼女は僕のことを好いていてくれるのだろうか。
中村が言ったように。そうなのだろうか。こんな僕を。
もしそうだとしても、彼女は、あまりにも僕にとって良すぎる人だ。あまりにも……。
それに、僕の気持ちはどうなんだろう？僕の気持ちは？
好きだなんて考えたこともなかったし、思いもしなかった。
だけど、彼女といると自然と心が安まったのは、なぜなんだろう？
あの日、彼女を副委員長に指名したのは、なぜだったのだろう？
そしてあの時、彼女を見ていると胸がドキドキしたのは、

今日、彼女に話しかけたかったのは、なぜだったのだろう？
好きだったんじゃ……ずーと、そうだったんじゃないだろうか。
ずーと。

式は終わりに近づいていた。在校生達の歌声が響いていた。
僕は、ますます重く心の中でつぶやいていた。
持たなくてもいい劣等意識だったのに。もっと、勇気を出せば良かったのに。
なぜ、こんなに弱気だったんだろうか？
なぜ、一言いえなかったのだろうか？

それから僕は、図書室へ行きづらくなった。
彼女と顔を合わせたくないような気がした。恥ずかしかったのだ。
彼女も同じだったのだろうか？
時に一緒になっても、以前ほど気楽には話さなかった。
そんな中で、僕は、まだ迷っていた。
彼女が好いてくれているのだろうか？
そして、自分は本当に彼女のことが好きなのだろうか？
僕は、彼女にはつり合わないんじゃないだろうか？と。

そんな息詰まる思いに耐えかねて、僕は、中村に相談することにした。
「なんだい、相談って？」
校庭の隅の木にもたれながら、彼がいった。
「うん。あのな、中村」
「なんだい。早くいえよ。言いづらいことか？」
確かに言いづらかった。言葉が出てこなかった。
「あの～、西岡さんのことなんだけど……」

彼がにやっとした。そうして、僕から目をそらし校庭の方を向いて、こういった。
「やっと、気がついたみたいだな、おまえ。彼女の気持ちが分かっただろう」
僕は、彼を見つめて頼むような気持ちでいった。
「本当にそう思うか？彼女が想ってくれていると。」
「ああ、思うよ。ずっと前からな。ずーと前から彼女は見ていたよ」
僕は信じられない気がしたが、しかし、また、こんな事を言ってしまった。
「それじゃあ、僕は彼女のことを好きなんだろうか？」
「なんだい、それ。自分の事じゃないか」
彼は、僕の方を向いていった。けれど、僕はうつむいてしまった。本当に、分からなかったから。
何も言わない僕を見て彼はいった。
「なあ、富。おまえ、特にこういうことには疎いのかも知れないが、俺が見ていた限りじゃ、おまえの方が、彼女をより好きなんだっていう気がする。彼女といるときのおまえは、生き生きしているよ」

そういわれたとき、僕は、胸の中が熱く火照って、締め付けられるような気になった。
ああ、好きなんだ。本当は、ずっと前から好きだったんだ。
そんな気持ちが、胸一杯に広がり、声が出なかった。うつむいたまま、肩が震えた。彼が言った。
「な、そうだろう、富」
「うん。ありがとう、中村」
僕はそういって、やっと彼を見上げた。
その様子を見ていた彼がしばらくして、また目を校庭に移して言った。
「富、これから、どうするんだ？」
「え？」

僕はまだ熱い胸で答えた。
「このまま卒業しちゃうつもりか？彼女が好きなら、一言うち明けろよ」
「う、うん」
僕はとまどった。そして、また、あの劣等感がよみがえってくるのを感じた。
「彼女はたぶん待っているんだ。おまえが気づいてくれるのを。そして、おまえの言葉を。今のままじゃ、いずれ別れてしまうぞ。卒業まで、もう半年もないんだ」
「う、うん……」
けれど、僕の心の中では、やはりあの劣等感が、急速に大きくなっていった。
彼女のことが好きだけど、本当に好きだけど、でも、彼女は僕にとって、あまりにもいい人なんだ。
僕なんかじゃつり合わない。僕なんかじゃ。

そうこうするうちに、やがて二学期が終わった。
言い出そうとしたこともあったのだが、やはりあの劣等感と、そして、僕の気の弱さのために、そうすることはできなかった。
彼女とも話しづらく、一緒にいると気まずくなってしまうこともあった。
三学期になると、もう、図書室へは足を運ぶ暇もなくなった。
入試勉強に追われ、夜も遅くなった。
そんな夜、もう薄らいできた空のあたりを見つめて、やはり、彼女のことを考えたりした。
そのたびに、自分の気の弱さと、決断力のなさに打ちひしがれるのだった。

式はすでに終わっていた。
僕たち卒業生は、在校生である二年生に見送られて、校舎から校門へと向かっていた。
雨は、やはり、しとしとと降り続き、僕たちは傘を差して歩いていた。
僕は、今日まで、やはり、なにも言うことはできなかった。
忙しさにまかせ、彼女を見ることすらなくなっていた。
心と同じように、重い足取りで僕はうつむいて歩いていた。
彼女を見たくなかった。
顔を合わせれば、また、何もいえない自己嫌悪が重くのしかかり、
僕の心を押しつぶしてしまいそうな気がした。

二年生が、思い思いに花束を手渡していた。
と、誰かが僕の傘の中へ飛び込んできた。
「富先輩、これ」
西岡さんだった。
彼女は手にした五本の赤いカーネーションを僕に差し出した。
僕は、彼女から目をそらそうとしたが、しかし、できなかった。
カーネーションを受け取ったとき、彼女が僕の目を見つめていった。
「先輩。わたし、好きだったんです。本当に、先輩が好きだったんです」
僕は、何か心から重い物がスーと抜けていくような気持ちで、こういった。
「僕も、好きだったんだ。君のことが…」
彼女は顔を赤らめて、スッと、傘の外へ出た。
「先輩、試験がんばってくださいね。元気でいてくださいね」
彼女は少し笑いながらそういうと、道の両側で見送っている多くの二年生の中に消えていった。

僕は、ふたたび歩き始めた。足取りは、びっくりするほど軽くなっていた。
心は、今まで占めていたものがすっかりなくなって、空虚に広がっているようだった。
そんな心で、僕は考えていた。
西岡さんとは、やっぱりこれで、お別れだろう。
だけど、彼女の姿は、僕の心の中で、光っていてくれる。
さっきまで重く沈んでいた記憶が、今は輝いている。
ありがとう、西岡さん。
僕は君にあこがれたまま、けれど、振り返らずに歩いていける。
さようなら……。

多くの卒業生とともに、僕は、手にした五本のカーネーションを握りしめ、校門を後にした。

おわり

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n9848c/

あこがれて、さようなら

2010年10月8日15時29分発行